

特別研究助成費 報告

「教育研究への活用を目的とする写真画像を含めた

民俗資料データベースの考察」

跡見学園女子大学 文学部 教授

伊藤 穰

跡見学園女子大学 文学部 教授

倉石あつ子

1. 民俗資料としての写真

民俗学の資料は、聞き取り調査をまとめて文章化したものと同時に、図（スケッチも含む。以下 図と表現する）や写真を使用することが多い。これらの資料を効率よく整理し、保管することは自身の研究のみならず、研究者や自身が担当する授業への還元もできる。図や写真を使用することは、文章だけでは理解がしにくかった部分を眼で確認することによって、理解が進むことは勿論である。本稿では跡見学園女子大学2009年度特別研究助成費（研究課題：民俗資料のマルチメディア・データベース構築のための手法の研究）を受給した報告として、民俗学における既存の写真整理方法と、現在の暮らしを如何に残していくかという点に視点をしぼり、報告することとする。とくに現在の生活を残す、という点に関しては、都市での民俗調査がしにくくなっているという事がいわれて久しい。では、都市居住者には生活文化がないのかといえ、そこに人が住んでいる以上生活は営まれており、それらの生活は自分のそれまでの生活を引きずって生活を営んでいるはずである。しかし、これらの生活は意識して残さないと、残って行かない。

近年デジタルカメラが普及し、写し取った被写体などはPC内のファイルに残したり、CDに焼き付けて残したりしていると聞か、携帯のカメラで撮影した写真等は携帯の機種を変更する前にきちんとどこかに保存したり、古い携帯機種を保存しておかない限り再確認することは難しい。例えば、卒業式の写真などを携帯やスマートフォン・デジタルカメラで互いに撮り合っているが、その写真ははどうするのだろうか？学生と一緒に「先生も入って一緒に撮って」と要請されて撮影することもままあるが、それらの写真が送られてきたことは稀にしかない。ということは、撮ったら終りなのか、とその後が変に気になってしまう。かつて、写真は撮る機会も少なく、撮れば印画紙に焼き付けてアルバムに貼るなどして保存しておいたので、現在一般の家庭でも明治末期から大正期ごろの写真を見ることが可能である。本稿では、まずカメラが電子化されなかった時代の写真の整理を考え、その後、現在の生活をどう残していくかを考察していきたい。ただし、紙幅の関係上、後者は次号に譲ることとする。

写真1は明治20年生まれ的女性が生家の母と撮影した記念写真である。当時の女性の結婚年齢は20歳前が一般的であったので、明治期の終わりごろのものと思われる。写真2はその翌年か翌々年ごろと思われ、写真1の女性が結婚して子どもが誕生し、子どもを抱いた同じ女性と父・母が写っている。子どもは女兒であるが、この写真からは男女の性別の判断はできない。子どもの大きさから、お宮参りか100日の食い初めの祝い頃のものと思われる。写真2は写真1からそれほど年が隔たっている



写真1



写真2



写真3 命名（現 長野県岡谷市）

感は受けないが、母親の羽織は2枚の写真では異なるし、女性の髪形も微妙に異なっている。こうした写真を見ると、子どもの着物や髪型・女性の着物や髪型・男性の着物などその時代の衣生活の一部を読みとることができる。また、写真3は女性の孫の命名紙と男児が写ったものであるが、命名紙と一緒に写しているところを見ると、やはり生後1〜3カ月ごろのものであろう。日の丸を背景にして撮影するあたり、昭和十一年という年がどのような年であったかを知ることでもできる。子どもの着ているものまでよく分からないが、右袖が見えるところから和服型のものであることまでは分かる。

これらの写真が収められたアルバムは14センチ×22センチほどの大きさで、40頁のものであるが、写真1・2あたりが一番古いものと思われ、中には持ち主（文久三 1863年生まれ）の子どもや孫やその関係者のものが貼られている。写真1・2は持ち主の娘の写真であり、写真2に写る女兒は持ち主にとっては初孫となる。その他には写真4のようなかなり日常生活臭が伺えるような写真や写真5から写真6のような当時の子どもたちの衣服の状況が分かるものが多い。

写真8は昭和2年正月と写真に書かれており、昭和2年であることが分かる。写真4から8のような写真は、誰が撮影したものか分からないが、カメラをもっている者が身近にいたということであろうか。また、写真9から写真13のように作業風景やその折の仕度、保養などを伺い知ることが可能な写真も見られる。



写真4 大正時代末か昭和初年頃
(現松本市)



写真5



写真6



写真7 登校



写真8 昭和2年正月



写真9 足踏脱穀機での稲こぎ



写真10 ため池工事の現場



写真11 隣組での花見



写真12 ワラビ狩り

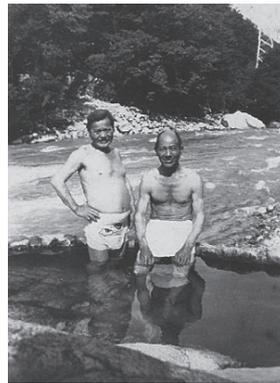


写真13 葛温泉で露天風呂を楽しむ



写真14 初節供 昭和15年ごろ

2. 写真をどう分類するか

さて、写真をいくつか並べて見たが、アルバムにはこの順序で貼られているわけではない。写真14までは、意図的に異なる分類項目を作成するために選択してみたものである。従来、民俗学が対象とするのは生活文化に関わる行為や観念を含めた広い範囲に亘っていたため、それを便宜的に分類し、社会生活（社会組織）・衣・食・住・生産生業・交通交易・人生儀礼・年中行事・信仰・昔話・民俗知識（たとえば『長野県史 民俗編』）などの分野に分けていた。もちろん、生活はこのような分類ですっきり分類できるわけではなく、これらが重層的に入り組みながら実際の生活は成り立っているし、調査する（した）年代によっても調査できていた項目ができにくくなっている場合もある。が、写真を整理する方法としては、これらの項目を使用することによって、整理の目安は付くであろう。もちろん、二つあるいは三つの項目にまたがるモノがあるが、その処理は後に考えることとする。これらの写真をなるべく嵩張らず、なおかつ分かりやすく整理するためにはどうすればよいだろうか。

これまでポケットのあるファイルに入れて整理していたが、これは場所をとる。また、必要な資料写真を探す時、アルバムをあちこちひっくり返して探すこともたびたびであり、結局見つけ出せずにやむなく二番手三番手の今一と思われる写真を使うこともままあった。そこで、折角さまざまな紙媒体なども電子ファイルで保存する方法がとられているので、写真整理もなんとか電子ファイルでできないか模索してみた。PCを使いこなせていない私が楽に作成できる電子ファイルは何か。「Microsoft PowerPoint（以下PPT）を活用するという手もある」という伊藤のちょっとしたアドバイスに従って、PPTでの整理を始めて見た。花躰記念資料館では平成24年跡見純弘顧問から、大量の写真がおさまったアルバムをご寄贈いただいた。専門家にアルバムの撮影を依頼し、その写真をワードに貼りつけて聞き取り調査をさせていただいたが、写真の大きさを変えると折角つけた↓などがまったく役に立たなくなってしまう。一枚ずつが固定されることが望ましい。それには大した技術を必要とせず簡単に作成できるPPTの活用は、もってこいかもしれない。そして分類も容易であるし、入れ替えもたやすい。そこで、上記写真14枚を、PPTを使用して整理をするとうなるか、というのが資料1である。これは便宜のためにA4に6枚入れて打出したモノを資料として掲載したが、実際にはCDおよびUSBで保管することにした。また、アルバムに貼られている順番でスキャンし、PPTに落とすことにしたが、今回その順番は省略した。

更に、既に一般的にみられなくなってしまった儀礼や事象が図や写真で残っている場合、それを文章や言葉で説明する難しさも生ずる。例えば、現在、倉石は「人文学研究入門B一幕末期から明治初期に訪れた外国人が見た日本の暮らしー」を受け持っていて、イザベラ・バードの『日本奥地紀行』を主たる題材にしているが、この著作の中には現在ではほとんど見られなくなってしまった、流れ灌頂が図示されている。図1がそれである。

その図には、「はじめて母となる喜びを知った時にこの世を去った女が、前世の悪業のために血の池という地獄の一つで苦しむことをと一般に人々は信じているか」を示しているという。そして傍を通りかかると、苦しんでいる女の苦しみを少しでも和らげてくれるように訴えている。なぜなら、その布が破れて水が直接こぼれ落ちるようになるまで、彼女は池の中に留まらなければならないのである」という説明がつけられている。流れ灌頂のしつらえ方も、「…木綿布の四隅を四本の竹の棒で吊り、布の上にも文字が書いてある。中略 布の中にはいつも木製の柄杓がおいてある。私が手ノ子（地名）から下って通りかかったとき、たまたま坊さんが道傍にあるそれらの一つに柄杓いっぱいの水を注いでいた。布はゆっくりと水浸しとなった」と記されている。しかし、この記述からだ



図1 流し祈願

けではなかなか図のしつらえは想像しにくい。図が添えられているからこそ、十分な理解が出来るというものである。

もちろん、学生たちは図とこの説明だけでは十分な理解が出来るわけではないから、流れ濯頂に関する説明と出産で亡くなった女性に対する葬送儀礼に関しての補足をしなければならないことはいうまでもない。が、今ではほとんど見られない儀礼の一つとしての貴重な資料であることは間違いのない。

このように図（スケッチ）や写真が具体的なイメージを喚起させる重要な資料であるが、では、その貴重な資料を整理した後、活用しやすくするためには他にどのような方法があるのかを考えて見たい。

3. 写真画像を含む民俗資料データベースの構築

前章までに示したように、情報技術の発展に伴い、生活の様々な場面や日用品の様態についての民俗資料が、デジタル情報として記録されるようになった。本章では、そうしたデジタル情報について、写真画像を中心に、研究や教育への利用を視野に入れたうえで、記録、保存、管理、運用の要素を含むデータベース構築の方法論について考察する。具体的には、3.1節にてデータベースの要件を考察し、3.2節では写真画像の特性について論じる。3.3節では、具体的なデータベースの構造について、一例を提案する。

3. 1. 教育や研究に利用しやすいデータベース

3. 1. 1 WWW上での展開

情報を記録し保存することには何らかの目的が存在する。教育や研究への活用は重要な目的のひとつである。その目的を果たすには、単に情報を記録し保存するだけでなく、情報を欲する利用者から発見されやすくし、かつ、利用されやすくする仕組み作りが必要である。情報の提供には様々な形態がありうるが、WWWが発達した現代においては、すなわち「WWW上で検索可能とする」と同時に「WWW上で情報を提供しうる」ことが重要な意味を持つ。そして、データベースを構築する際には、これらを実現するための技術的な支援が必要不可欠である。ここで留意すべきことは、「情報の形態」、「個別の情報への橋渡しをするポータル機能」、そして、「公開の形態とその範囲」である。

3. 1. 2 デジタル情報の変換

デジタル情報の形態としては、画像、動画、音声、文書などメディア的な特徴による区別が考えられるが、それぞれのメディアにおいても、多様な表現形式がある。たとえば、画像ファイルや動画ファイルには多くの圧縮方法があり、対応するソフトウェアを用いることで初めて閲覧が可能となる場合もある。文書ファイルについても、テキスト形式とバイナリ形式に分けられ、さらに、バイナリ形式はソフトウェアの仕様に大きく依存する。Microsoft Wordの文書もこれに該当する。そして、利用者は、必ずしも多様な形態に対応できるとは限らない。WWWで情報を提供するには、可能な限り汎用的な表現形式を選択する必要がある。具体的には、文書であればテキスト形式、もしくはスタンダード化しているPDF形式を用いることとなる。これは場合によっては、汎用的な形式へとファイルを変換する技術が必要であることを意味する。

3. 1. 3 ポータル機能の必要性

また、こうした様々な形態の情報を提供するには、それらを検索可能とすることが重要である。そのためには、個別の情報への橋渡しをするポータル機能が不可欠である。WWWに公開するには、その機能とネットワーク環境を備えたサーバ上に、電子ファイルとしてデジタル情報を配置することになるが、それだけでは情報を公開したことになる。サーバ上の電子ファイルは自動的にWWW上のアドレスであるURLを持つが、その存在を他者から認識可能とするためには、URL自体もしくはURLへのハイパーリンクを公示する必要がある。そのことによって初めて、GoogleやYahoo!などの大手検索サイトにも認識されうる。すなわち、情報と同時に、情報の目録も公開する必要がある。

その際、目録の提示方法にも考慮を要する。大手検索サイトによる情報収集への対応だけでなく、個人の利用者の利便性を高めることも重要だからである。とくに、デジタル情報の点数が多量に及ぶ場合は、多種のカテゴリーによる分類などの工夫が考えられる。また、サーバ上に検索機能を構築し、検索語に応じて動的に目録やウェブページを生成するなどの仕組みを導入することで、利便性は高まるものと考えられる。

ただし、サーバ上の検索機能のみに依存すると、大手検索サイトにおいて検索結果として表示される可能性が大きく低下する。大手検索サイトは、原則として静的なハイパーリンクを横断することで情報を収集するからである。このことは、既に稼働しているデータベースサービスにおいて重視されていない場合があり、改善すべき点であると考えられる。有名なデータベースサービスでない限りは、その存在自体の認知度が低い場合、まず、そのサービスが利用者の目に留まる必要がある。そして、個別のサービス上で検

索語を入力することで初めて情報が得られる仕組みであるとする、データベースの全体像や、検索可能な項目が分かりにくい、利便性は高まらない。それ以前に、利用者の視点からは、個別のデータベースサービスにおいてそれぞれに検索語を入力することを繰り返す作業は煩雑である。こうしたことから、仮に点数が膨大な場合であっても、静的かつ網羅的な目録を提供する仕組みは必要であるとする。たとえば、跡見学園女子大学図書館の『百人一首コレクション画像データベース』では、検索語を入力せずに検索を行うことによって全資料の一覧を得ることができ、大手検索サイト上からも到達可能となっている。

さらには、目録において、資料の名称やURLだけでなく、資料に関する様々な情報も併記することによって、絞り込みを容易にすることも重要である。たとえば、大手検索サービスにおいて民俗資料を検索する場合、検索語を「農具」とすると、Googleにおいて375,000件（平成25年12月現在）が該当する。一方、検索語を追加して「農具 鎌 江戸時代」とすると12,000件となる。併記する情報としては、資料の年代や法量、材質、用途などが考えられる。これに加えて、研究者や利用者が、より細かい情報や、あるいは印象に基づく抽象的な表現なども包含することが可能となれば、より曖昧な検索語での絞り込みも可能となる。動画共有サイトなどでは、こうした仕組みを「タグ」と呼び、コンテンツのグループ化などに応用している。教育や研究目的においても有効な手段のひとつであるとする。

3. 1. 4 公開の形態とその範囲

デジタル情報をWWW上で公開する際には、WWWの特質について理解し、その公開の形態と範囲を設定することが必要である。WWW上の情報はアクセスが容易であるだけでなく、複製や転載にコストがかからないことから、場合によっては情報が広く拡散してしまう恐れがある。そのため、とくに人権に関わるデリケートな事柄については留意すべきである[1]。対策として、「何をどこまで提供するか」について精査したうえで、データベースの目的に応じて、公開の範囲をLAN内に限定することなどが考えられる。また、画像や動画については、解像度が高いほど資料として有用であると思われる一方で、ネットワーク回線の状況によっては情報の取得に時間がかかるほか、サーバ上の容量を圧迫するなどの欠点がある。所有しているデジタル情報をそのまま掲載するのではなく、ファイルサイズを圧縮するなどの工夫が必要である。なお、画像については複数のファイルについて同時にサイズ変更を行うフリーソフトが公開されており、操作も簡便である。

次章では、とくに写真画像について、その特性を踏まえたうえで、民俗資料としての取り扱い方について考察する。

3. 2. 民俗資料としての写真画像の特性

3. 2. 1 画像へのマーキング

教育や研究における写真画像の有効性については改めて論じるまでもない。ただし、それを資料として公開する際には、その特性を理解しておく必要がある。

写真画像は非言語的な情報である。そのため、被写体の名称や、撮影された状況などについては明示的ではない。ゆえに、解説用の文字情報が付随することが望ましい。そして、とくに意識すべきことは、写真画像は二次元のメディアであり、画像内の情報は画像内において位置を持つということである。

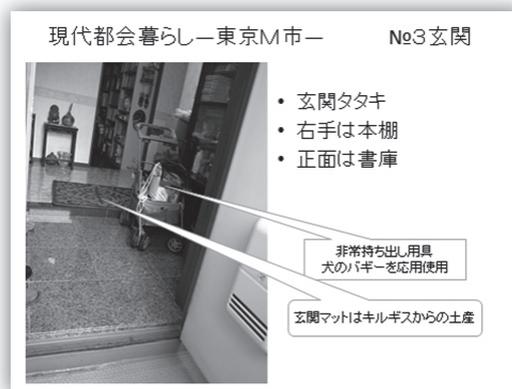


図2：PPTにより位置を明示している例

多くの場合、ひとつの画像内には複数の被写体があり、さらにそれぞれの被写体には部分が存在する。すなわち、解説を行う際には、画像内の部位を正確に明示する必要があるということである。たとえば「写真右下」といった表現では不十分である場合もある。そこで、画像中にマーキングのための情報を追加するなどの加工を行うことが考えられる。図2は、PPTを用いて、画像内の位置を吹き出しによって表現している例である。教育目的において学生が自律的に学修を行う場面を想定すると、錯誤の発生を防ぐ手立てを講じることは重要である。

3. 2. 2 画像処理技術の必要性

資料的な価値を保全する立場からは、写真画像は無加工であることが望ましい。しかしながら、とくに民俗資料としては個人のプライバシーに関わる内容や、時に現代の社会的な了解とは異なる内容が含まれる場合もありうる。個人情報保護法は故人を対象としないとはいえ、存命する関係者の迷惑となる事態は避けなければならない。そこで、場合によっては画像処理を行う必要性が生じる。具体的には、人物の顔にフィルターをかけることにより個人の識別を困難とする処理や、画像の切り出しなどである。いずれも、画像処理ソフトを用いることで簡単に実行することができる。図3は、フリーソフト「irfanView」のフィルター機能を用いた例である。また、そのような加工を施した場合は、その旨を明記したうえで、元画像の閲覧については書面での申請を課すなど、その運用について組織内で検討し、教育や研究への活用の道を残すべきであろう。

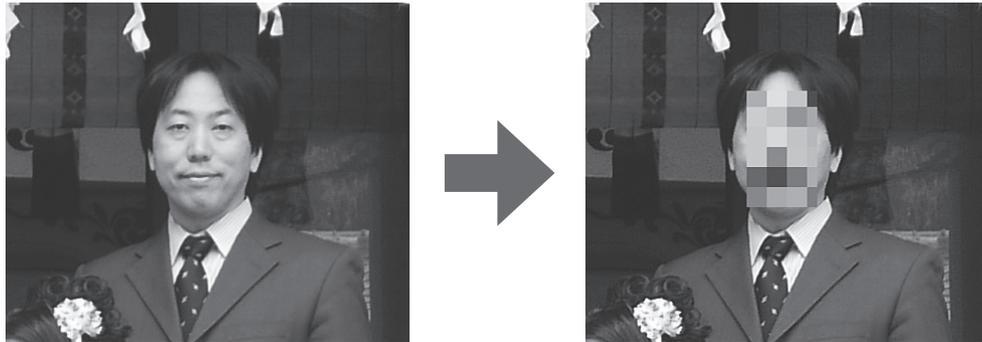


図3：フリーソフト「irfanView」によるフィルターの適用

また、人物写真を新たに撮影し収集する際には、個人情報保護の観点から、WWWでの公開を行う際に画像処理を施すことを許諾の条件とする、といったことも想定される。情報社会においては、写真を撮る側と撮られる側とに、慎重な合意形成が必要であり、研究を円滑に進めるうえでの大切な要素のひとつとなっているものと考えられる。

3. 3. 具体的な運用方法

3. 3. 1 基本設計

これまでの議論を踏まえ、写真画像を含めた民俗資料のデータベースの一例を提案する。ここではとくに、教育への活用を意識し、教育現場において容易に利用できる形式とすることを念頭に置く。

データベースの基本的な構造としては、CSV形式で目録を作成し、それをXML技術およびプログラミング言語であるPHPの技術によってウェブページとして表示する。そして、写真画像、およびその解説を電子ファイルとしてサーバ上に配置する。

拙稿 [2] で論じたように、データベースの構築と運用は、専門的な技術に依存しないことが望ましい。常に専門家の助力が得られるとは限らないからである。目録はMicrosoft Excelで作成し、それをCSV形式で保存する。あるいは、より簡素な手段として、Excelから直接的にウェブページを生成することもありうるが、この手法では網羅的な目録のみ作成可能である。XMLやPHPを用いる場合は、拙稿[2]で示したものを流用することにより、容易にデータベースを構築できるだけでなく、検索機能を付加することもできる。

3. 3. 2 PPTで作成したファイルの利用

PPTは、様々なメディアを組み合わせて表現する手段として、技術の修得が比較的容易である。また、写真画像について、画像内の位置の特定も容易である。そこで、WWW上で公開する情報に、PPTによって作成した資料を含めることとした。利用者の立場からも、とくに教育目的である場合は、教材として即戦力ともなりうる点は重要である。

ただし、PPTのファイル形式は必ずしも汎用的ではない。そこで、様々な環境に対応するため、PDFに変換したもの、さらにはPDFをHTML形式に変換したものなどを配置しておき、利用者が選択できるようにすることが望ましい。また、PPTで用いた写真画像についても、画像ファイルとして配置しておくことも考えられる。いずれにおいても、目録にそれぞれへのハイパーリンクを含めることで、簡単にアクセスすることが可能となる。

4. まとめ

本稿では、民俗資料としての写真画像の意義や、その整理方法、そして、教育研究への活用を目的とするデータベース構築の手法について考察した。写真画像は、撮影意図とは関係なく、民俗資料としての性格を帯び、無限に増加してゆく。こうした資料を有効に収集し整理することの有効性は疑う余地もない。そして、現代の生活について積極的に資料として保全するうえで、写真の撮影技術や編集、保存の技術についても考察すべきであろう。さらには、静止画のみでなく、動画の取り扱いにも多くの検討すべき課題が残されている。こうしたマルチメディアを活用するための研究は、今後も継続してゆくべきであると考えられる。

なお、本稿は2009年度特別研究助成費「民俗資料のマルチメディア・データベース構築のための手法の研究」を受給した成果報告である。改めて、関係各位に謝意を表する次第である。

参考文献

- [1] 「民俗学研究におけるインターネットの活用と留意点」, 伊藤穰, 『縁 -集いの広場-』第4号
- [2] 「跡見学園内の芸術資産等をデジタルアーカイブ化するための方法論の研究」, 伊藤穰, 跡見学園女子大学花蹊記念資料館・学芸員課程『にいくら』No17
- [3] 『長野県史 民俗編』1984年3月から刊行が始まり、1991年12月まで計14冊 長野県史刊行会

資料1 PPTの一コマ

A1-1 明治40年代ごろか 衣・人・社会



- ・美津の長女千春(明治14年3月生まれ)が林家に嫁いだ(嫁ぐ=明治40年9月7日)折の写真か。
- ・座っているのは千春の母親にあたる美津
- ・まだ、二人とも髻を結っている。
- ・千春は母親から機織り・裁縫などを習ったほか、松本まで通って染物も習得した。

A1-2 明治40年代か 衣・人・社会



- ・千春の長女 俊子が生まれた記念写真であろう。
- ・千春が抱いた子どもと一緒に千春の両親が写っている。
- ・子どもは広口の振りそでの着物によだれかけをしている。髪は頂上だけを残して剃ったものか。
- ・母親の着物には縹子の黒縁が掛けられている。
- ・明治41~2年の写真。

A1-3 S11年 人・社会



- ・千春の孫(美津の曾孫)の命名
- ・現 岡谷市に生まれる
- ・昭和11年9月の日付が見られる
- ・後ろに日の丸を立てての撮影は、当時の日本の社会情勢(戦争へと進む折)の中で、男児が生まれたことへの祝いの気持ちが読みとれる

A1-4 T末~昭和初 衣



- ・美津の嫁と孫
- ・背中の子どもの年齢から大正末年か昭和初年頃の写真と思われる
- ・右から長女・二男・嫁・次女・長男という並びである。長女は当時14・5歳で、背が伸びてつんつるてんになった着物からは生足がのぞいている。寒い季節と見えて、別珍らしき足袋を穿いている

A1-5 T末~S初 衣・社



- ・大正末期か昭和初年頃のモノ
- ・A家の池のほとりで撮影されたモノ。
- ・美津の長男の嫁と嫁が抱くのは二男。横に立つのは次女。
- ・次女は白いエプロンをかけている。当時エプロンを日常的にかけるのは珍しかった。ミシンかけが得たという長女の作か。

A1-6 S初頃 衣・社



- ・美津の孫 長男(実際には長男は死亡しているので二男だが、ここでは長男と記す)
- ・小学校へ入学したところその直前ごろ。
- ・木綿の縞の着物に緋の半纏らしきものを着て、足袋をはいている。履物は草履か下駄か定かではない。下着の袖も見えている。
- ・着物・半纏とも綿入れか。